

# 介護老人保健施設しおん

症 例 概 要    ご利用者：90代 男性

利用期間：令和5年5月よりしおん入所

病名：高血圧症、前立腺症、腰椎湾曲症、全盲

経過：若い頃は若干光が見えていたが、現在は光も感じず全盲。23歳でマッサージの学校に行き、東日本大震災の後、少しの間マッサージの仕事をしていたが腰の痛みもあり、その後は行っていない。

足の不自由な妻と2人暮らしをしていたが、妻の足の調子が悪くなり入院、その後、施設入所となり独居生活になる。近くに住む娘と孫が泊まりながら支援を行っていたが長期にわたる支援が困難な為、令和5年5月にしおんに入所される。

## 内 容

全盲の為、自宅では自身の椅子周辺に必要な物を置き行動範囲が限られた状態で生活を送られていた。入所時、生活環境の変化から混乱しないよう、まずは居室内のレイアウトをしっかりと把握してもらう取り組みを実施した。トイレや布団の設置場所を決める際、全盲を前提に考え、壁を伝って歩きトイレがある、居室の出入り口がある等、突き当たりが目印となるようなレイアウトにし、ユニット職員の声掛けとりハビリの時はご本人が把握するまでの間、反復練習を行った。

また、ご家族よりこれまでベッドを使用した事がないとの情報があった事や入所前のSS利用時、ベッドを使用した際ご本人が混乱した経緯もあった為、転倒や転落、ご本人の混乱を防ぐ必要があると考え、居室内にプレイマットを敷き、ベッドマットで対応する事となる。

半月程の反復練習で居室内のレイアウトを把握された。音声タイプの時計を利用して時間の管理も行い、入所後1か月程で手すりや杖を使用し食事前に自らフロアに出てくる様子も見られるようになった。入所から半年ほど経った頃、「私の薬はどこだ?」や朝の6時頃に「今から床屋に行くんだ。毎日行ってんだから」等、頻繁に不穏になる様子が見られるようになった。フロアに来てテレビの音声や他のご利用者が話している会話などを聞くことにより、ご本人が混乱してしまうような状況になってしまうのではないかと考え、以前ユニット内でコロナクラスターになった際、居室対応していた時は混乱や不穏な様子は見られず、穏やかに過ごされていたこともあり、居室内で過ごしてもらってはどうか?と、ユニット内で検討し、試しに1週間様子を見ることにした。それと同時に、以前マッサージの仕事をしていたため、ユニットでも1週間に1回男性職員出勤時にマッサージをお願いし、取り組んでもらった。その後は、特に不穏な様子も見られず、混乱したような言動も無かったことから、ご家族に居室内での対応に切り替え、無理のない範囲でマッサージも職員にしてもらっている事を報告し了解を得た。マッサージをしているときは、

これまでに見たことがないうれしそうな表情をしており、そのことも報告すると、娘さんは「そうなんですか？それは良かったです。父も励みになると思います。」と喜んでおられた。その後は、ご家族より持参いただいた趣味の点字の読み物などを読んだり、週1回男性職員へのマッサージを行ってもらい、ご本人からマッサージがない日は「今日はマッサージしなくていいのかな？」と自発的な発言も聞かれるようになり、穏やかに現在も経過されている。本来であれば施設側がサービスをするところ、ご利用者がスタッフにサービスすることで生きがいを感じてくれるというのは稀なケースかと思いますが、ご本人のご意向を尊重した結果でありキラキラと輝く日々を送られています。